

東京大学所蔵「ヘンリー・ダイアー関係図書」をめぐる考察

加藤 詔 士

一．褒賞制度

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848—1918) といつて、明治はじめに英国から招かれたお雇い外国人がいる。工学寮ならびに工部大学校という官立専門学校の都検(教頭)として、また土木・機械工学教授として、明治六(一八七三)年から一五(一八八二)年まで在任し、工学専門教育の組織化を指導した。日本の工学教育制度の基礎を築いた人として知られている。

ダイアーは、お雇い外国人としての契約を解除されてからも、日本と緊密な関係を保ちつづけ、日英の交流を促進した点でも注目される。故郷のグラスゴウに帰ってからは、日本研究を推しすすめ、その成果を『大日本・東洋の英国』や『世界政治のなかの日本』などという大著¹⁾にまとめて世に問うた。明治三五(一九〇二)年には日本政府の帝国財政及工業通信員に任ぜられたし、グラスゴウに留学してきた日本人学生の生活と教育を支援してもいる。外遊の

機会に立ち寄った教え子には、指導と激励をなすこともあつた²⁾。

東京帝国大学名誉教授の称号を受けたり、勲三等旭日中綬賞、さらには勲二等瑞宝賞が授与されたのも、そうした功勞による。叙勲調書には、工部大学校の創業にあたり、「先ツ学課並諸規則ヲ選定シ而シテ又校舎ノ構造教場ノ位置等ヲ計画シ及ヒ工学ニ関スル一切ノ器械書籍等ヲ装置スルノ準備ヲナシ」たとある。また、帰国後は「本邦ヨリ英国ニ渡航スル諸学校教授文部省留学生等ニシテ同国ニ滞在中同人ノ為メ種々盡力ヲ受クルモノ少ナカラス殊ニ日露戦役中ハ終始克ク帝国政府ニ対シ好意ヲ表シ絶ヘス有益ナル諸報告ヲ為シ大ニ利益ヲ与フル」と記されてもいる³⁾。

ダイアーが指導した工学寮ならびに工部大学校は、工業技術の実務的な人材養成のための専門教育機関であり、いくつかの変遷をたどつて、現在の東京大学大学院工学研究科に至つてゐる。それだけに、同大学にはダイアーにかかわる種々の資料や事物が残されている。図書、申報という年間授業報告、胸像⁴⁾などである。

そのうち、図書は総合図書館ならびに大学院工学研究科の各図書室に保存されている。なかでも、成績優秀者に賞品として授与された図書のうちダイアーの署名が入った図書、ならびにダイアーの日本再訪のための歓迎費と記念事業資金をもとにして購入された図書が、とくに注目される。本稿でいう「ヘンリー・ダイアー関係図書」とは、この二種類の図書をさす。これらは、工部大学校という明治はじめの学校における、褒賞という教育慣行を考察するうえで有益であるし、何よりも日本の工学教育の発足期におけるダイアーの指導性の証左となるからである。

二. ダイアー署名入り図書

(1)

成績の優秀者に賞品ならびに賞状を授与するという、教育慣行がある。この褒賞という慣行は、今も昔も、内外を問わずおこなわれている。

わが国の場合、賞品として、かつては懐中硯、石盤、大筆などの学用品が多かった。男子には帽子、女子にはかんざしを与えたという記録もある。金銭を授与したところもあった^①。なかでも、書籍を与えるところは実に多かった。すでに江戸時代に、昌平坂学問所では「勤学の御褒美」として年末に「官版の書籍など」が下されていた。明治時代に入っても、多くの小学校では「小学修身訓」「地誌略」「習字手本」「小学問答」「小学算術」などといった書籍が与えられている^②。とくに書籍が貴重であったころだけに、褒賞によ

る勉学の奨励という効果は大きかったにちがいない^③。

(2)

褒賞として贈られた書籍は、和書に限ったわけではなく、洋書も授与されている。工部大学校においても、勉学の奨励という意図から洋書が賞品として贈呈されていた。

同校では、しっかりした褒賞規定があつて、明治十(一八七七)年三月の「学課並諸規則」の場合には、夏季に、各級のなかで優秀な生徒三名を選び、一等には十円、二等には八円、三等には七円に相当する書籍か器具が、それぞれ賞品として授与される。また、全生徒のなかから「予科諸学ノ試問ヲ受ケ毫モ失誤ナキ者」二名に対し、特賞として三〇円および二〇円相当の賞品を贈る、と定められていた^④。

明治十八(一八八五)年四月に改正された規定では、毎年冬期の終わりに、予科と専門科の各級から優秀生を数名えらんで、「書籍或ハ器具ノ賞品ヲ與フ」ことになっていたし、予科二年生のなかから最優等者二名に「特別ノ賞品」が授与されていた^⑤。

これらの規定にもとづいた褒賞の記録は、「工部省年報」に具体的に収められている^⑥。たとえば、「工部省第三回年報」には、「明治十年冬期試験生徒賞典」と題して、「普通学全科優等賞」ならびに学科ごとの賞典記録がある。前者は、全科優等賞として二名の学生に「チャンプル氏インサイクロペジャ」が授与された、という記録である。後者は、学科別・学年ごとの第一等から第三等までの記録であつて、のべ七〇名の学生に種々の賞品が授与されている。

「工部省第四回年報」の場合には、明治「十一年ヨリ十二年ニ至ル冬期試験賞典」の記録がある。まず、「予科学優等特別賞典」の項は、下記のように記されている。

第二年生

- 第一 一 チャンブル氏、エンサイクロペジヤ十冊 田辺 朔郎
- 第二 一 チエンバー氏、エンサイクロペジヤ十冊 宇治橋嘉一
- 第三 一 ランキン氏、土木学巻部 水上彦太郎

- 一同氏応用重学巻部
- 一同氏蒸気機関論巻部
- 一同氏工学法式并諸表巻部
- 一 スマイルス自助論巻部

一同氏品行論巻部

但シ例年貳名ノ処今年ハ点数ノ差太タ少ナルヲ以テ三名トス

ついで、学科別・学年ごとの賞典の部では、第一等から第三等までのべ七〇名の学生が褒賞されている。

そのさい、賞品は図書（洋書）がほとんどであるが、とくに図学科の場合は、「器具」もあわせて授与されたことが特筆される。製図器械、図引器械、スタンレー製小形図学器械、彩色器械、絵具、象牙尺度などと記された教具である。ちなみに、第三回年報にある、図学科一年生の賞典記録を示すとつぎのとおりである。

- 第一等 一 シモンソン氏 ブラックチャール、ソレレットメント 宇治橋嘉一
- 一 製図器械一箱

第二等 一 ウイントル氏セラメトリカル、ドロイーイング 水上彦太郎

一 インヂニールイキング、ドロイーイング

一 製図器械一箱

第三等 一 グブイットソン氏遠景面術書 田辺 朔郎

一 マキストン氏工學上図学書

一 タレン氏平面幾何図学書

一 製図小器械一箱

褒賞の規定があり、実際に賞品が授与されたという記録があるなら、つぎに考察すべき課題は、授与された図書を具体的に確定し検討することである。

東京大学総合図書館にはこうした賞品として授与された図書が所蔵されており、褒賞の具体的な内容と方式について知ることができ。たとえば、左記の三書がそれであつて、各書の表紙裏の板紙にその旨を示す賞状が貼付されているから、それとわかる。賞状の大きさはまちまちである（図1の賞状は縦一七三ミリ、横一一〇ミリ）が、いずれも、工部大学の校章の下に、趣旨、受賞者、授与者が英文で記されている。この授与者欄に、ダイアーの署名が入っているのである。ただし、賞状の形式は一樣ではない。工部大学の存続期間中、褒賞の字句および形式に若干の変容がみられるから、具体的に取りあげてみる必要がある。

- ① W. J. M. Rankine, *A Manual of the Steam Engine and Other Prime Movers*, Charles Griffin and Company, London, 1874, 7th ed.

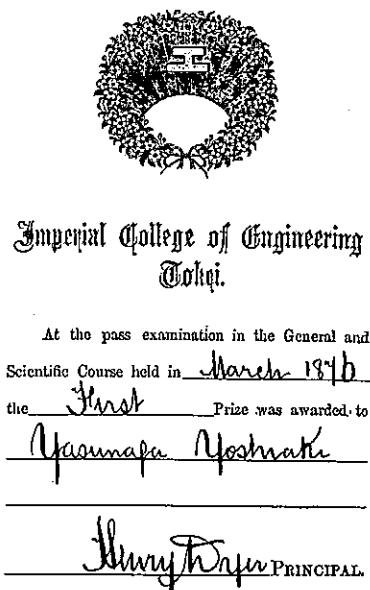
② W. J. M. Rankine, *A Manual of Machinery and Millwork.*

Charles Griffin and Company, London, 1873, 2nd ed.

③ J. Perry, *An Elementary Treatise on Steam.* Macmillan and Co., London, 1874. (2)

まず、右の第一書と第二書に貼られた賞状は下記のような文面である(図1参照)。「一八七六年三月におこなわれた普通・専門課程の予科試験で、安永義章に一等賞を授与する」というのである。安永義章は機械科の一等賞として受賞したのだが、この両書は機械科だけでなく、他の学科でも第一等および第二等の賞品として贈呈されており、「工部省第三回年報」のなかの賞典の記録には、それぞれ「ランキン氏蒸気機関論」、「ランキン氏マシナリー、エンド、ミルウォルク」と記されている(3)。ちなみに、著者のランキン(M. Rankine, 1820—1872)とはグラスゴウ大学教授で、ダイアーの

図1. H.ダイアー署名入りの賞状(その1)



指導教授でもあった人である。

「Imperial College of Engineering,

Tokyo,

At the pass examination in the General and

Scientific Course held in March 1876

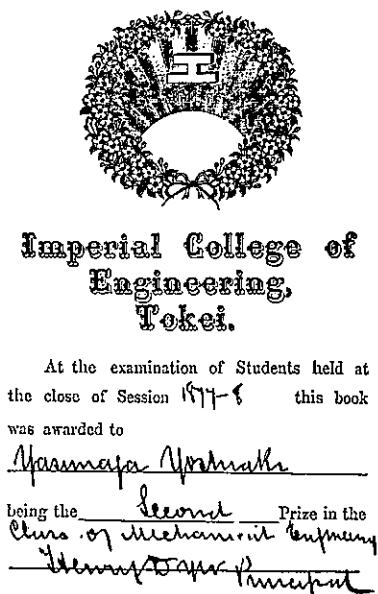
the First Prize was awarded to

Yasunaga Yoshitaki

Henry Dyer Principal.]

それが、第三書になると、賞状の文面は下記のように変わっている(図2参照)。「一八七七年度末」、すなわち一八七八(明治十一年五月におこなわれた試験において、「機械工学クラス二等賞の安永義章に本書が授与された」というのである。「工部省第三回年報」によると、同書は「明治十年冬期試験」の賞品であり、安永はその

図2. H.ダイアー署名入りの賞状(その2)



第四学年機械学科四一名のなかの第二等を占めたので、表記のよう
な「ペリ氏スチーム」をはじめ八冊の洋書をたしかに贈られている
。ちなみに、同書の著者ペリー (John Perry, 1850—1920) とは
工部大学の「土木学並機械学」教授である。

「At the examination of Students held at
the close of Session 1877—8 this book
was awarded to

Yasunaga Yoshiki

being the Second Prize in the

Class of Mechanical Engineering

Henry Dyer Principal」

受賞者の安永義章 (一八五五—一九一八) は、工部大学の機械
科に学び、明治十三 (一八八〇) 年五月に卒業した学生である。八
幡製鉄所の技師として活躍した。のちに、兵器製造を学びにドイツ
およびフランスへ留学している。

上掲の賞状の文面のうち下線部分がペンで書きいれられている
(図1、図2参照) が、ダイアアのセルフ・ポートレート裏面に
みられる署名、あるいはダイアアの書簡などに徴してみると、いず
れも授与者ダイアアの直筆と思われる。署名もダイアア自身のもの
にちがいない。

なお、工部大学の賞品として授与された図書は、ダイアアの署
名入り図書だけに限らない。それとは別に、「担当教師の署名入り
の書籍や学用品が賞品として与えられた」ことも注目される。この

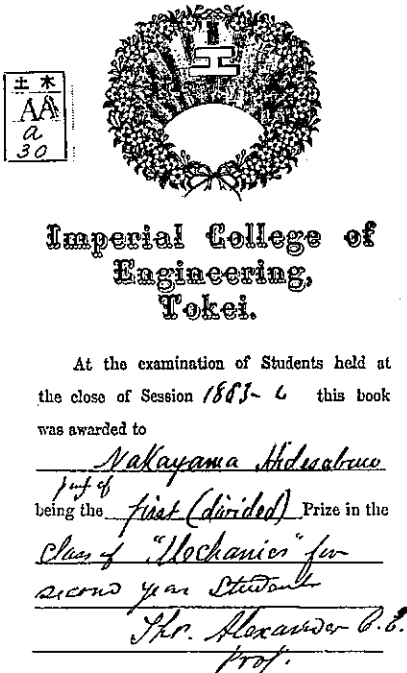
種の図書として、東京大学には、

T. Alexander, *Elementary Applied Mechanics*. Macmillan and
Co., London, 1880.

という一書が所蔵されている。ただし、所蔵先は同大学総合図書館
ではなく、大学院工学研究科社会基盤工学専攻図書室 (土木工学科
図書室) である。

同書にも、前出の三書と同じように、表紙裏の板紙に賞状が確か
に貼付されている。ただし、その文面も形式も前出の三書とは異な
り、左記のようになっていて (図3参照)。サイズも縦一九〇ミリ、
横一二五ミリという大きさである。

図3. T.アレクサンダー署名入りの賞状



Imperial College of

Engineering,

Tokel.

At the examination of Students held at

the close of Session 1883—4 this book

was awarded to

Nakayama Hidesaburo

part of

being the first (divided) Prize in the

Class of "Mechanics" for

second year Student

Thos. Alexander C. E.

[Prof.]

一八八三(明治十六)年度末というから、ダイアーが離日した翌年の試験において、「機械学」クラス第一等賞として、土木工学二年生の中山秀三郎(一八六四—一九三六)に、アレキサンダー教授から贈呈されたものである。アレキサンダー(Thomas Alexander, 一八四三—一九三三)は明治十二(一八七九)年から明治十八(一八八五)年まで在任し、機械工学を担当したお雇い教師である。そのかれが、刊行されて間もない自著を賞品として贈呈したというわけである²¹⁾。

(3)

褒賞として図書を授与するという工部大学校の教育慣行は、卒業

生の遺品や関係資料をとおしても具体的に裏づけることができる。たとえば、琵琶湖の疎水工事を計画して水力発電事業のパイオニアとして知られる田辺朔郎(一八六一—一九四四、明治十六年土木学科卒)の場合は、在学中、毎年度受賞している。

『工部省年報』には、毎年度ではなく、第三回年報および第四回年報にかれの一年次および二年次の受賞記録が記載されており、一年次には三学科で図書十二点と器具一点を、二年次には図書十点と器具一点を、それぞれ受賞している²²⁾。

田辺の在学中の受賞図書のうち、遺品として残っている図書は、表1にまとめた二六点(厳密には二五点)である²³⁾。同表は田辺家資料のなかから筆者が確認しえた受賞図書の一覧であり、ここから具体的な図書名を知ることができる。

遺品として残るこれらの受賞図書をそれぞれ調査してみると、まず第一に、いずれの図書も刊行されてまもない、いわば新刊本であったことが注目される。第二に、そのうち、ダイアーの署名入りの賞状が貼付された図書は四点含まれており、また、担当教師の署名入りの図書は二二点にのぼっている。担当教師とは前出の機械工学教授T・アレクサンダーのほかに、数学・自然哲学教授D・H・マールシヤル(David Henry Marshall, 1848—1932)、数学教授F・プリンクリー(Francis Brinkley, 1841—1912)、化学教授E・ダイヴァーズ(Edward Divers, 1837—1912)、土木機械学教師A・W・トムソン(A. W. Thomson)の各氏である。そして第三に、受賞図書に貼付された賞状の形式ならびに字句は、図4および図5からわかる

表1. 田辺家資料における田辺朔郎の受賞図書一覧

年度	受賞クラス	授与者	受賞図書
1876	幾何学優等賞	R. O. R. P.	A. Smith, <i>A Boy's Ascent of Mont Blanc</i> (Ward, Lock and Tyler, London, n.d.)
1877	自然哲学一等賞	H. Dyer	A. F. Weinhold, <i>Introduction to Experimental Physics, Theoretical and Practical, including Directions for Constructing Physical Apparatus and for Making Experiments.</i> trans. & ed. by B. Loevy (Longmans, London, 1875)
	自然哲学一等賞	H. Dyer	J. N. Lockyer, <i>Elementary Lessons in Astronomy</i> (Macmillan, London, 1877 new ed.)
	自然哲学一等賞	H. Dyer	W. Thomson & P. G. Tait, <i>Elements of Natural Philosophy.</i> Part I (Cambridge U. P., Cambridge, 1872)
	数学一等賞	D. H. Marshall	B. Stewart, <i>The Conservation of Energy being an Elementary Treatise on Energy and its Laws</i> (Henry S. King & Co., London, 1877 4th ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	D. Brewster, <i>The Life of Sir Issac Newton</i> (William Tegg, London, 1875, revised & ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	B. Stewart, <i>An Elementary Treatise on Heat</i> (Clarendon Press, Oxford, 1876 3rd ed.)
	数学一等賞	D. H. Marshall	I. Todhunter, <i>A Treatise on Plane Co-ordinance Geometry as Applied to the Straight Line and the Conic Sections, with New Examples</i> (Macmillan, London, 1874 5th ed.)
1878	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	[賞状のみ。受賞図書は不明]
	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	J. F. W. Herschel, <i>Outlines of Astronomy</i> (Longmans, London, 1878)
	自然哲学二等賞	D. H. Marshall	P. G. Tait, <i>Sketch of Thermodynamics</i> (David Douglas, Edinburgh, 1877 2nd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	R. A. Proctor, <i>The Sun: Ruler, Fire, Light, and Life of the Planetary System</i> (Longmans, London, 1876 3rd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	I. Todhunter, <i>A History of the Mathematical Theories of Attraction and the Figure of the Earth, from the Time of Newton to That of Laplace.</i> vol.I (Macmillan, London, 1873)
	数学一等賞	F. Brinkley	I. Todhunter, <i>A History of the Mathematical Theories of Attraction and the Figure of the Earth, from the Time of Newton to That of Laplace.</i> vol.II (Macmillan, London, 1873)
	数学一等賞	F. Brinkley	R. A. Proctor, <i>The Moon, Her Motions, Aspect, Scenery, and Physical Condition</i> (Longmans, London, 1878 2nd ed.)
	化学二等賞	E. Divers	W. A. Miller, <i>Elements of Chemistry: Theoretical and Practical.</i> Part I, Chemical Physics. revised by H. McLeod (Longmans, London, 1877, 6th ed.)
化学二等賞	E. Divers	W. A. Miller, <i>Elements of Chemistry Theoretical and Practical.</i> , Part II, Inorganic Chemistry. revised by C. E. Groves (Longmans, London, 1878, 6th ed.)	

1879	特別賞	T. Alexander	T. N. Talfourd, <i>The Works of Charles Lamb: Complete in One Volume, with A Sketch of His Life</i> (J. B. Lippincott & Co., Philadelphia, 1870)
	自然哲学三等賞	E. Divers	J. Wolfe, <i>Railway Appliances, a Description of Details of Railway Construction Subsequent to the Completion of the Earthworks and Structures Including a Short Notice of Railway Rolling Stock, with illustrations</i> (Longmans, London, 1878 2nd ed.)
	応用工学三等賞	T. Alexander	W. J. M. Rankine, <i>A Manual of Applied Mechanics</i> . revised by E. F. Bamber (Charles Griffin and Company, London, 1877 9th ed.)
	自然哲学三等賞	D. H. Marshall	A. Guillemin, <i>The Heavens, An Illustrated Handbook of Popular Astronomy</i> . ed. by J. N. Lockyer (Richard Bentley & Son, London, 1878)
	field work三等賞	A. W. Thomson	W. J. M. Rankine, <i>Useful Rules and Tables Relating to Mensuration, Engineering, Structures, and Machines</i> . revised by E. F. Bamber (Charles Griffin & Company, London, 1876 5th ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	O. C. D. Ross, <i>Air as Fuel; or, Petroleum and Other Mineral Oils Utilized by Carburetting Air and Rendering It Inflammable</i> (E. & F. N. Spon, London, 1875 2nd ed.)
	数学一等賞	F. Brinkley	W. B. Scott, <i>Gems of Modern German Art, A Series of Carbon-Photographs from the Pictures of Eminent Modern Artists, with Remarks on the Works Selected, and an Essay on the Schools of Germany</i> (George Routledge and Sons, London & N. Y., 1873)
1880	基礎工学一等賞	H. Dyer	A. P. Deschanel, <i>Elementary Treatise on Natural Philosophy</i> . tran. & ed. by J. D. Everett (Blackie & Son, London, 1880 5th ed.)
	土木工学一等賞	A. W. Thompson	S. Smiles, <i>Lives of the Engineers, the Locomotives, George and Robert Stephenson</i> (John Murray, London, 1879, new & revised ed.)

図4. 田辺家資料のなかのH.ダイアー署名入りの賞状

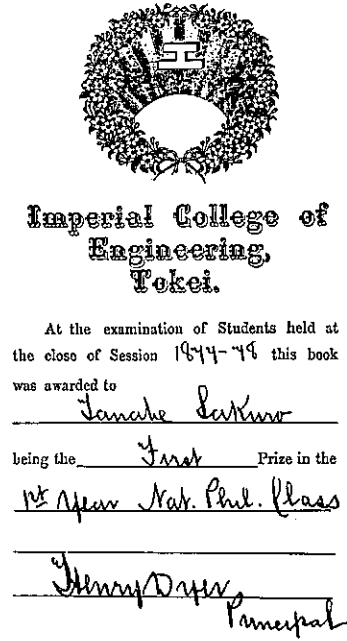
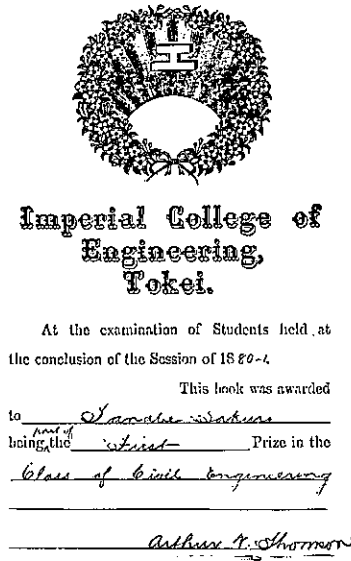


図5. 田辺家資料のなかのT.アレクサンダー署名入りの賞状



ように、上述の東京大学所蔵図書とほとんど同じである。工部大
学校において褒賞として図書を授与する方式は、先に示したような
方式であったのである。

東京大学所蔵「ヘンリー・ダイアー関係図書」をめぐる考察

そのほか、菅原恒覧（一八五九—一九四〇、明治十九年土木学科
卒）といって、丹那トンネルなどの鉄道建設に多大な業績を残した
土木界の改革者の場合は、『菅原恒覧自叙伝』のなかに受賞記録が
明記されている。それによると、明治十四（一八八一）年に一年生
から二年生に進級するさいの試験で、英語科の一等賞として英書三
冊、理学科では二等賞として英書一冊を、それぞれ贈られている。
二年生の下半期には、英語科二等賞として英書三冊、化学科二等賞
として英書二冊、高等数学科は二等賞として英書一冊、和漢学特別
賞として『康熙字典』一部を、それぞれ受領している。さらに、三
年生から四年生に進級するとき、「地質学科にて一等賞として英書
三冊、金石学科にて一等賞として英書三冊、測量科にて二等賞とし
て英書一冊を賞賜」せられたのだった。

(4)

工部大学校において褒賞規定があることに注目して、「学生への
褒賞として書籍を与えるのはスコットランド独自の教育的伝統であ
る」と指摘するむきがある。『東京大学百年史』でも、「これは英
国でもとくにスコットランドの伝統といわれ」る、と記されている。
しかし、この記述はかならずしも正確ではないように思われ
る。

工部大学校ではスコットランド人教師で都検（教頭）でもあった
H・ダイアーの教育構想が大幅に受け入れられたし、グラスゴウ大
学などスコットランドの高等教育機関に学んだ教師が多かったこ
と、そして校内では英国式の教育と生活がおこなわれていたことは

確かであるけれども、当時の他の官立学校や各地にある種々の学校でも、同じような事例が認められるのである。

たとえば、駒場農学校がそうであつて、試験成績の優秀者に書籍が贈られている。同校といへば、工部大学校と同じころに創置された、農学の高等専門教育機関である。アメリカ人教師の指導のもとにあつたのだが、同校でも、たとえば明治十一（一八七八）年の場合、優等第一の学生には『ウエブストル英語大辞典』かまたは『ポルン農書』が、優等第二の学生には『附音挿図英和字彙』または『タンクリソン薬名辞書』が授与されていたのである。²⁵『附音挿図英和字彙』とは「五〇〇余の図解を本文及び巻末に添えたことで日本で最初の本格的な英和図解辞典」として知られる。「明治前期の英和辞書としては最も優れたもの」であり、明治六（一八七三）年に刊行された洋装本である。²⁶

工部大学校や駒場農学校という中央の高等専門教育機関だけに限らない。地方の、たとえば愛知県公立医学校（名古屋大学医学部の前身）でも、明治十一（一八七八）年の規則のなかに、一期末ごとの定期試問（口述試験）の成績上位者に「金銀書籍器械等」の褒賞を与えるという規定があつた。²⁷

同じ愛知県の洋学校（愛知県立旭丘高校の前身）になると、明治五（一八七二）年五月二〇日におこなわれた仏学クラスの成績優秀者への賞与式で、お雇いフランス人教師のP・J・ムリエ（Pierre Joseph Moutier、1827—?）自身が、「平素格別勉強進歩之効拔群」の最優秀生に洋書一部（二十五円）を授与している。名古屋の物価

指数でいへば、一円で米二斗九升（四三・五キロ）が買えたころの話であるから、いかに高価な洋書であつたかがわかる。²⁸

度会県（現在の三重県）伊勢市にあつた宮崎外国語学校という半官半民の学校でも、優等生に種々の英書、たとえばパーレー万国史、スイントレ万国史、チャンブル万国史、チャンブル窮理書などを与えて勉学が奨励されたし、洋紙一折ないし半折が褒賞として与えられることがあつた、という記録がある。²⁹

なお、工部美術学校といつて、工学寮および工部大学校に付設された官立美術学校の場合は、イタリア人教師の指導下にあつたのだが、ここでは「油絵具、銀時計、水画（絵）具、水画紙横文人、図引紙、図引器械、鉛筆」が、「進歩」や「精勤」（「勉勵」）の賞品として与えられた」ことが知られている。³⁰

(5)

当時、書籍は高価であり、なかでも洋書を入手し学習に活用することは容易でなかつたはずである。それだけに、洋書を、それも舶来の洋書を褒賞として授与されるということは、たいへんな名譽であつたにちがいない。

名譽の賞品であるなら大切に保存されたであろうが、その一方、代表的な洋書なら最新の知の成果が盛りこまれているはずだから、あたらしい情報を素早く貪欲に汲みつくそうとした者もいたはずである。前出の東京大学総合図書館所蔵図書の場合、全編にかなりの書きこみが認められ、実にたんねんな勉強ぶりがうかがわれる。

書きこみは、本文のなかや小口に、ペンまたは鉛筆でていねいに

加えられている。本文の補説、間違い個所の修正や指摘（たとえば、「Wrong?」と書き添えられている）、参照ないし関連の頁数の記入もある。索引のなかにも、見出し項目の追記および記載頁がひとつづついいねいに書き加えられている。

前出の『ペリ氏スチーム』、すなわち J. Perry, *An Elementary Treatise on Steam* (1874) の場合、本文にはのべ三八か所の書きこみがあり、索引にも見出し項目と記載頁の追記が数多くなされており、実にたんねんに活用されたことがうかがわれる。ランキン著『蒸気機関論』(第七版)、すなわち W. J. M. Rankine, *A Manual of the Steam Engine and Other Prime Movers* (1874, 7th ed.) の方は本文五七五頁という大著だが、のべ三八頁にわたって補説や修正、参照個所などの書きこみがみられる。そうとう長文の補説も何か所かみられ、それも実にていねいな英文で書きこまれているのである^⑧。

三、ダイアー博士記念図書

(1)

お雇い外国人は明治日本を建設する助っ人として招かれたが、任務を終え雇用契約が解かれれば母国に戻るものが多く、あくまでも一時的な学術文化の伝来者であった。しかし、帰国したのち、ふたたびなつかしの日本を訪れた者も少なくない^⑨。かつて若いころ、近代化を促進する手助けにやってきた日本が、期待にこたえて文明化されつつある国に変身していく姿を見てみたいと思ったにちがいない。

ダイアーもそうした一人であった。しかし、日本再訪を切望しながら、とうとう叶えられることがなかった。明治六(一八七三)年六月、二四歳のとき単身で来日し、翌年にはいいなずけを迎えて横浜で結婚。新家庭をきづき、十年近くにおよぶ滞日中に四人の子どもに恵まれた^⑩。職務の面でも、自分の思い描いた工学教育構想の実現に力を発揮し、日本が「東洋の英国」になるようおおいに尽力することができた。やがて日本がいよいよ「東洋の英国」に近づきつつあったころ、しかも、かつての教え子たちが育ち日本が指導的人材を自家養成できるようになったころ、かれら指導的人材のなかから、恩師ダイアーの日本再訪を実現しようという計画がもちあがったのであった。

そのさい、工部大学の卒業生がおこした虎之門会と、グラスゴウ留学のさいに同地に在住していたダイアーから支援と励ましを受けた諸氏が中心になって組織したグラスゴウ会の有志とが相はかつて、ダイアーを日本に招くことが準備され、募金呼びかけられたのである。

ダイアー自身も日本再訪を望んでいた。大正時代のはじめに「日本へ再遊ノ意志」があったのだけれども、折悪しく第一次大戦となり、やむなく来日を見合わせていた。

「おそろしい戦争が終結するのはまだまだ近そうではなく、権勢ある人たちは長期戦になるといっています。日本訪問が延期になり、わたしはとてものがっかりしています。戦争があまり長引かず、日本を訪れることができますよう祈っています。」

大正六（一九一七）年十一月十五日付けの、田辺朝郎にあてた書簡で、ダイアーはこのように記している⁵⁶。

ダイアーの日本再訪を歓迎しようという事業は、実は、これより二年以上も前に計画されていた。田辺は、すでに大正四（一九一五）年二月一〇日付けのダイアーへあてた書簡のなかで、虎之門会の会合においてダイアーの「日本訪問は戦争のため延期された」ことを伝えた模様である。ダイアーは同年の四月七日付けで田辺にあてた書簡で、そのことを明らかにしている。

「二月一〇日付けのお手紙をいただき、虎之門会の会合のことを知りました。日本訪問が戦争のため延期されたことは、大変がっかりです。会員の皆さまのご好意に感謝し、戦争が終わってから訪問できることをおおいに期待して待つていることを伝えたいと思います。しかし、戦争は長引くのではと思います。」

「戦争が長引く」のではと懸念しながらも、ダイアーは日本再訪を心待ちにしていた。それは、「大日本・東洋の英国」あるいは「世界政治のなかの日本」などにつづく、あたらしい日本研究の企画のためでもあったようで、同上の書簡でつぎのように書き送っている。

「わたしは今、極東、とりわけ日本と中国の事態の進展についておおいに関心をもって研究しています。日本に行ったら、太平洋地域の出来事の進展ぶりと、同地域と日本との関連について、もう一冊執筆するための資料をいっぱい手にしたいと思います。世界史において将来もつとも重要な出来事はこの地域で

おこるであろうと確信しますので、これからおこるさまざまな進展について慎重に研究すべきなのです。」

ダイアーは掛け物についても関心をもって、「日本を訪れたら掛け物を探す」つもりだとも伝えていた⁵⁷。

ダイアーは、再来日できることを強く待ち望んでいたのだが、残念ながらついに実現をみることはなかった。大正七（一九一八）年の九月二五日に死去してしまったのである⁵⁸。

(2)

ダイアーを招待する計画はとうとう実現しなかった。けれども、そのかわり、歓迎事業は形を変えて成果を生みだした。醸金をもたにして歓迎費と記念事業資金が用意されたので、その残部が東京帝国大学工科大学（工部大学の後身）に寄付され、工学関係図書が購入されることになったのである。この事業計画は、石橋絢彦（一八五二—一九三二）が中心になってすすめられた。石橋は、後述のように、この計画の「総代」あるいは「代表者」と当時の記録に記されている。かれは工部大学の第一期卒業生であって、土木工学とくに灯台学を専攻し、同校の第一回派遣留學生に選ばれた十一名のうちの一人であった。明治十三（一八八〇）年に英国へ赴き、灯台技師長クラスののもとで灯台工事や海上工事を学んでいる。横浜市内の「吉田橋の改橋に着手、日本最初の鉄筋コンクリート橋」を建設したことで知られる⁵⁹。

ダイアー先生歓迎事業費でもって購入された図書は、洋書一二二冊と伝えられている。そのさい、「工学部各科に必要な図書を備

へ、之に故ダイエル先生の写真及小伝を帖付し永遠に先生の我国工学及工業の開発に対する功績を記念すること」が図られた^⑧。大正十五（一九二六）年の六月から九月にかけて、納入と分配、そして登録がなされている。

それでは、どのような図書が購入され寄贈されたのか。また、それらの図書に貼付された「ダイエル先生の写真及小伝」とは、具体的にどのようなものであろうか、考察すべき重要な課題となる。しかしながら、『東京帝国大学図書館寄贈図書目録』一一一〇（大正十二年—昭和二年）に記載されるとか、類似の寄贈目録でもあれば造作はないが、依拠すべきこの種の目録はみあたらない。しかも、寄贈図書は一括して保管されているわけではなく、実は工科大学の各学科に分けられたのだった。そこで、東京大学工学部「図書受入原簿」などを手がかりにして、大学院工学研究科（旧工学部）各学科の図書室の所蔵図書を、具体的に調べてみることにした。その結果、これこそダイアー博士記念図書だと確定できる図書に出あうことはできた。けれども、その数はそれほど多くはなく、現在のところ、二〇数冊を数えるにとどまっている。別掲の表2のとおりである。

ダイアー博士記念図書が贈呈されたところ、東京帝国大学工科大学は冶金学、土木学、機械工学、探鉱学、航空学、建築学の六学科から構成されていた。そのうち、まず、当時の冶金学科には、ダイアー博士記念図書として六冊配本された。いずれも一九二四年（大正十三）か二五（大正十四）年に出版された、英語およびドイツ語の新刊本である。図書原簿^⑨には

「左記六種六冊価格金百〇老円七拾銭也故ヘンリー、ダイエル氏記念図書トシテ元工部大学校卒業生並ニグラスゴー会ノ有志総代工学博士石橋絢彦氏ヨリ大正十五年六月十六日附ニテ当教室用トシテ寄附セラル。」

とあるが、六冊のうちの一冊は行方がわかっていない。現在の大学院材料工学専攻（旧冶金学科）図書室には、「ダイエル博士記念図書引」という貼り紙があるのは、H. J. Gough, *The Fatigue of Metals* (Scott, Greenwood & Son, London, 1924)をはじめ、五冊を確認できる。「ダイエル先生の写真及小伝」というのは、この貼り紙のことを指す。

土木学科（現在の大学院社会基盤工学専攻）の場合は、八冊贈呈された。大正十五年八月に「ダイエル博士記念図書工学部事務室ヨリ分配」され、九月十六日付で登録されている。購入価格は合計一〇〇、八〇〇円であった^⑩。ただし、「ダイエル博士記念図書引」が貼付されている図書は、八冊中、五冊しか確認できない。

機械工学部の図書室になると、「ヘンリー・ダイエル博士寄贈記念図書」として八種類九冊が備えつけられ、大正十五年七月二十九日付で登録されている^⑪。現在の機械系三学科図書室で確認できるのは、そのうち四冊である。G. A. Hool & N. C. Johnson, *Handbook of Building Construction, Data for Architects, Designing and Constructing Engineers, and Contractors* (McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1920)と二巻本も含まれている。

探鉱学科の場合は六種七冊が分配され、現在も大学院地球システ

表2. 東京大学における「ダイアー博士記念図書」(判明分) 一覧

配本先 (所蔵先)	配本数	ダイアー博士記念図書 [請求番号・登録番号]
冶金学科 (大学院材料工学専攻図書室)	6冊	① H. J. Gough, <i>The Fatigue of Metals</i> . Scott, Greenwood & Son, London, 1924. [z-g-02-00, T6662] ② G. H. Manlove, <i>Scrap Metals, Study of Iron and Steel Old Material, its Preparation and Markets</i> . The Penton Publishing Co., Cleveland, O., 1925, 2nd ed.. [o-m-02-01, T6664] ③ J. W. Mellor, <i>A Comprehensive Treatise on Inorganic and Theoretical Chemistry</i> . Longmans, Green and Co., London, 1925. [b-m-01-60, T6665] ④ I. P. Oberhoffer, <i>Das Technische Eisen, Konstitution und Eigenschaften</i> . Verlag von Julius Springer, Berlin, 1925. [q-o-03-01, T6666] ⑤ C. F. Wade, <i>A Manual of Fuel Economy, for Engineers and Others in Charge of Boiler and Furnace Plants</i> . Chapman & Hall, Ltd., London, 1924. [h-w-09-00, T6667]
土木学科 (大学院社会基盤工学専攻図書室)	8冊	① C. F. Harding, <i>Electric Railway Engineering</i> . McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1926. [LM-h-09, T6169] ② E. H. Salmon, <i>Columns, A Treatise on the Strength and Design of Compression Members</i> . Henry Frowde and Hodder & Stoughton, London, n.d. [AA-s-30, T6170] ③ P. Frank & R. v. Mises, <i>Die Differential-und Integralgleichungen der Mechanik und Physik</i> . Druck und Verlag von Friedr, Braunschweig, 1925. [HI-r-09, T6171] ④ T. R. Agg, <i>The Construction of Roads and Pavements</i> . McGrawHill Book Company, N. Y., 1924, 3rd ed. [MA-a-0102, T6174] ⑤ W. Gehler, <i>Der Rahmen, Ein Hilfsbuch zur Berechnung von Rahmen aus Eisen und Eisenbeton mit Ausgeführten Beispielen</i> , Verlag von Wilhelm Ernst & Sohn, Berlin, 1925. [AE-g-13, T6175]
機械工学科 (大学院機械系三学科図書室)	8冊	① R. v. Mises, <i>Die Differential-und Integralgleichungen der Mechanik und Physik</i> . Druck und Verlag von Friedr. Vieweg & Sohn Akt.-Ges, Braunschweig, 1925. [Bg-12-12, T6299] ② G. A. Hool & N. C. Johnson (eds.), <i>Handbook of Building Construction, Data for Architects, Designing and Constructing Engineers, and Contractors</i> . Vol.I, McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1920. [Xi-4-11, T6301] ③ G. A. Hool & N. C. Johnson (eds.), <i>Ibid.</i> , Vol. II, McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1920. [Xi-4-21, T6301] ④ I. A. Gessner, <i>Mehrfach Gelagerte Abgesetzte und Gekröpfte Kurbelwellen, Anleitung für die Statische Berechnung Mit Durchgeführten Beispielen aus der Praxis</i> . Verlag von Julius Springer, Berlin, 1926. [He-18-11, T6302]

<p>採鉱学科 (大学院地球システム工学科図書室)</p>	<p>7冊</p>	<p>① H. F. Bulman & Sir R. A. S. Redmayne, <i>Colliery Working and Management Comprising the Duties of a Colliery Manager the Superintendence & Arrangement of Labour & Wages and the Different Systems of Working Coal Seams</i>. Crosby Lockwood and Son, London, 1925, 4th ed., Thoroughly Revised and Much Enlarged. [9-7-4, T6391]</p> <p>② A. B. Thompson, <i>Oil-Field Exploration and Development, A Practical Guide for Oil-Field Prospectors and Operators, With Which Is Incorporated a Discussion of the Origin and Distribution of Petroleum, and Notes on Oil-Field Legislation and Customs</i>, Vol.I, Oil-field Principles. Crosby Lockwood and Son, London, 1925. [T7135]</p> <p>③ A. B. Thompson, <i>Ibid.</i>, Vol.II, Oil-field Practice. Crosby Lockwood and Son, London, 1925. [4-75-2, T6390]</p> <p>④ R. H. Richards & C. E. Locke, <i>A Text Book of Ore Dressing</i>. McGraw-Hill Book Company, N. Y., 1925 (2nd ed. Completely Revised and Rewritten. [12-65, T6392]</p> <p>⑤ J. Joly, <i>The Surface-History of the Earth</i>. Clarendon Press, Oxford, 1925. [2-163, T6393]</p> <p>⑥ R. W. Phelps & F. W. Lake, <i>Petroleum Engineering</i>. Gulf Publishing Company, Houston, Texas, 1924. [4-76, T6394]</p> <p>⑦ R. H. Rastall, <i>The Geology of the Metalliferous Deposits</i>. Cambridge U. P., Cambridge, 1923. [3-97-2, T6395]</p>
<p>航空学科 (大学院航空宇宙学科図書室)</p>	<p>32冊</p>	<p>① J. Pryde (ed.), <i>Mathematical Tables Consisting of Logarithms of Numbers 1 to 108000 Trigonometrical, Nautical and Other Tables</i>. W. & R. Chambers, London, 1872, new ed. [91-C7(1), 6486]</p>
<p>建築学科</p>	<p>なし</p>	

工学科図書室にすべて保存されている。H. F. Bulman & Sir R. A. S. Redmayne, *Colliery Working and Management Comprising the Duties of a Colliery Manager the Superintendence & Arrangement of Labour & Wages and the Different Systems of Working Coal Seams* (Crosby Lockwood and Son, London, 1925, 4th ed., Thoroughly Revised and Much Enlarged) という、何度も版を重ねている図書も含まれている。同室の『図書原簿』には、「寄贈、ダイエル博士記念、代表者石橋絢彦」と記されており、ダイエル博士記念図書贈呈事業は、石橋絢彦が中心であったことがわかる。各冊の価格が記入されているので計算してみると、合計一三八ポンド八〇ペンスとなる^④。

航空学科（現在の大学院航空宇宙学専攻）はどうかというと、工学部の大正十五年度『図書受入原簿』からすると、四種類三二冊も分配されたと推定される^⑤。けれども、「ダイエル博士記念図書引」が貼られた図書となると、現在は、一冊を確認するにとどまっている。

建築学科の場合は、該当の図書はみあたらない^⑥。目下のところ、確認するに至っていない。

(6)

ダイアーを記念した寄贈図書は、「ダイエル博士記念図書引」という見出しの貼り紙（図6参照）があるから、それとわかる。いず

図6. 「ダイエル博士記念図書引」



ダイエル博士記念図書引

此書ハ元工部大専攻卒業生並ニグラスゴー会ノ有志相謀リ元工部大
 学校部檢故ヘンリー・ダイエル博士ノ記念トシテ大專ニ獻ジタルモノ
 ニシテ後進勸學ノ一助トナラバ博士並ニ有志ノ満足スル所ナリ
 ダイエル博士ハ西曆千八百四拾八年八月十六日蘇蘭州スウェルニ生
 レグラスゴー大專ニ入り成績優等ヲ以テウィットウオルス受賞生ニ
 昇ケラレ名譽第五ナリ明治四年工部省ニ工學醫後工部大學ト改稱セ
 リ此年歐州ニ遊學シ六年ロンドンニ來リ其年ニ工部大專ニ教授トシテ招
 請セラレ數人ノ教師ト共ニ來朝シ其年ニ工部大專ニ教授トシテ招
 ラレ其時ノ上英文ノ略ニ曰ク本國設立ノ目的ハ實業無限ノ物産ニ歸テ公共ノ便宜ヲ起スニキ工部大專ニ在リテ
 ヲ人民ノ進歩ヲ助ケタル器械器具アリ諸般物品製造ノ技術アリ加之後來公私ノ工事ヲ管理シ又後進ノ先導トナリ
 實業歴史ニ新氣象ヲ添フル人傑ノ輩出スルニ及ンテ誠ハ我等ノ敬慕ノ所ノ功績ナリト賞ハル、ヲ掛ハ外遊等ノ事ナリ云
 ヲ、十五年五月経議技術家養成ノ功ヲ賞シ勳三等ニ叙セラレ旭日中校軍ヲ授ケラルル次ニ在滿子業ヲエドワルド、ダイ
 エル氏ニ選リ英國ス十九年工部大專ヲ帝國大學ニ移ヤル、時此ニ入校者四百九拾五人ノ内道學者百十一人死亡八人ア
 リテ卒業生二百六人修業生五人ニ上ル之ヲ理學部ノ卒業生九十八人ニ比スレバ二倍餘ヲ出シテ、博士ハ醫國後工業教
 育及其振興ニ盡力セテグラスゴー大專ヨリ名譽法學博士ノ學位ヲ授ケラレ、又John Galt, B.Sc. 等々著シ及在
 留邦人ヲ扶掖スルコト甚ダ願シ此輩グラスゴー會ヲ興シ又工部大專卒業生皆テ虎門會ヲ興ス大正初年博士日本ニ再遊
 ノ意志アリ二會員合國シテ先生ヲ歡迎セントス歐州大取組ル先生關係ニ奔走シ遊學ヲ竣フシ勳志ヲ果サント約
 シ七年九月二十五日同シテ先生ヲ歡迎セントス歐州大取組ル先生關係ニ奔走シ遊學ヲ竣フシ勳志ヲ果サント約
 圖書ヲ購ヒ之ヲ大專ニ獻ジ工學發榮ノ實ニ供シ併セテ英文ニ撰書セラレタル如ク日本ニ於ケル工學ノ開闢トシテ先生
 ノ偉績ヲ永ク後進ニ傳ヘントス

れの図書についても、おもて表紙の裏側の見返しに貼られている。引とは、はしがき(序)の意味である。

「此書ハ元工部大専攻卒業生並ニグラスゴー会ノ有志相謀リ元工部大専攻校部檢故ヘンリー・ダイエル博士ノ記念トシテ大專ニ獻ジタルモノニシテ後進勸學ノ一助トナラバ博士並ニ有志ノ満足スル所ナリ」

と始まり、ダイアーの略歴を記したあと、とりわけ日本での工学家材の育成におけるかれの貢献と、帰国後における日英交流への寄与とについて、称えている。具体的に紹介すると、大略、つぎのとおりである。

ダイアーは、一八四八(嘉永元)年八月十六日、スコットランド

のボスウエルに生まれた。グラスゴウ大学に修学し、成績優等により「ウイットオルス受賞生」に選ばれるなど、顕著な名声を残している。明治四（一八七一）年、工部省に工学寮（のちに工部大学校と改称）が置かれ、六年から授業が開講される時、「大学ノ都検」として招へいされ、数名の教師とともに来日した。

明治十一（一八七八）年に明治天皇が同校に臨まれたさいには、上奏するという榮譽をになつてゐる。そのさい、「本校設立ノ目的ハ貴国無限ノ物産ニ拠テ公衆ノ便益ヲ起スベキ工師ヲ教育スルニ在リ」と述べた。「人民ノ進歩ヲ助クル無数ノ機械器具アリ諸般物品製造ノ技術アリ加之後來公私ノ工事ヲ管理シ又後進ノ先導トナリ貴国歴史ニ新彩ヲ添フル人傑ノ輩出スルニ及ンデ或ハ我等ノ致ス所ノ功績ナリト言ハル、ヲ得バ外臣等ノ幸ナリ」とも評している。明治十五（一八八二）年五月には、技術者養成の功により、明治政府から勲三等に叙せられ旭日中綬章が授与された。任期が満了になると、都検職をE・ダイヴァーズ (Edward Divers, 1837—1912) に譲つて帰国した。

工部大学校は明治十九（一八八六）年に帝国大学に移管されるが、この時までの入学者は四九三名で、そのうち退学者は一一一名、死亡八名、卒業生二〇六名、修業生五名を数えた。これは帝国大学理学部の卒業生九〇名の二倍余にのぼつてゐる。

ダイアーは帰国後も工学教育の振興等に尽力し、グラスゴウ大学から名誉法学博士の学位を贈られた。また、『大日本・東洋の英国』などの著述をなしたり、「在留邦人ヲ扶掖スルコト甚ダ」しかつた、

ということが特筆される。

ダイアーの日本と英国での貢献を以上のように称えたあと、図書の寄贈に至る経緯と事情についても、つぎのように述べられている。ダイアー自身、大正時代の初年に「日本へ再遊ノ意志」があつただけに、虎門会とグラスゴウ会が合同してダイアーを歓迎しようといふことになつたが、第一次世界大戦の勃発とダイアーの死去により、とうとう計画は実現をみることはなかつた。

そこで、有志はダイアー夫人の意向に沿うて、図書を寄贈することになつた。歓迎費ならびに記念資金でもつて「工科ニ必要ナル図書」を購入し、これを大学に贈つて「工学啓発ノ資」に供するとともに、あわせて「日本ニ於ケル工学ノ開祖トシテ先生ノ偉績ヲ永ク後生ニ伝ヘン」とした、というのである。ダイアーの歓迎計画が転じて購入されたこれらの記念図書を通じて、今もなお、その遺徳を偲ぶことができる。

なお、この記念図書の贈呈という事業は、既述したように、恩師ダイアーを慕う虎之門会とグラスゴウ会の有志が企画したものであるが、虎之門会の面々は、これより前にも、ダイアーへの謝意を表する贈り物をしてゐる。アルバムを二冊作成し、これを豪華な漆箱に入れ、ロンドンの駐英日本大使を通じて贈呈したのである。アルバムには自分たちの写真、とりわけ日本産業界の指導者たちの人物写真が含まれてゐた。かれらはダイアー先生の薫陶をうけたおかげで今日あることを報告し、心からの謝意を表しようとしたのであつた。このアルバム贈呈の趣旨は、「恩師だいたえる博士へ記念品進呈

ノ件ニ付稟告（第三回虎ノ門会ニ於テ發起）」と題する、明治四〇（一九〇七）年四月付で発せられた呼びかけ文⁵⁶に詳しい。その本文は、つぎのように記されている。

「へんりー、だいある博士ハ旧工部大学校都検ノ職ニ在ルコト十有余年終始一貫能ク其任務ヲ盡クサレタリ当時我國ノ工業極メテ幼稚ニシテ所謂手工ノ時代ニ属シ欧米人ヨリ之ヲ視レバ殆ンド工業ナカリシナラン隨テ吾人工学生タル者教理、理化学ノ觀念ニ乏シク今ヨリ当時ヲ追想スレバ吾人ヲ教授スルノ労苦ハ或ハ小学兒童ヲ教育スルニ均シカリシヤモ知ルベカラズ然ルニだいたいの師ハ能ク堪へ能ク忍ビ悠々迫ラズ慈父ノ愛ヲ以テ吾人ヲ誘掖薰陶シ一毫モ倦厭ノ色アルヲ見ズ吾人其温容ニ接スルヤ恰モ温室ニ入ルノ感アリシハ吾人ノ尚ホ記憶スル所ナリ今ヤ我國ノ工業駸々トシテ進ミ駟モ尚ホ及バザルノ隆運ニ達シタルニ對シテハ吾人亦全ク功ナキニ非ズト信ズ而シテ其本源ニ溯レバ之ヲだいたいの師ニ帰スベキヤ論ヲ待タズ今日師弟ノ情誼殆ンド廢滅ニ帰シ師ハ学ヲ売り弟ハ之ヲ買フ者ノ如シ而モ師弟ノ情誼ハ決シテ廢滅スベキニアラズ是ニ於テ同志相謀りあるはむヲ特製シ吾人ノ肖像ヲ挿入シ之ヲ恩師ニ進呈シテ聊カ誠意ヲ表セント欲ス冀クハ同感ノ諸彦此舉ヲ贊助セラレンコトヲ

明治四十年四月

石橋 絢彦 小花冬吉 辰野金吾
 委員 玉木辨太郎 真野文二 的場 中
 三好晋六郎 下瀬雅允

この記念品贈呈のことは、「日本人エンジニアとヘンリー・ダイアー博士」という見出しで、『グラスゴウ・ヘラルド』紙（一九〇九年二月二四日）にも報道されている⁵⁷。

四．ダイアー関係圖書の意義

近代日本の発足期に創置された工部大学校という工学の高等専門教育機関では、基本的に英国人教師が英語の教科書を使用して英語でもって指導していた。そのさい、同校では、早くからひんぱんに試験を実施し、その成績にもとづく進級制度とともに、賞品を授与する褒賞制度が確立していた。

褒賞制度の一つとして、洋書が賞品として贈られ、これに賞状が添えられたことが注目される。その賞状の一つは都検（教頭）であるダイアー自身が記入した賞状であり、賞状は賞品の圖書に貼付された。ダイアーは工部大学校の都検（教頭）であり、当時の工学教育の先導者であっただけに、勉学のいつそこの進展を図るといふ褒賞の効用は絶大であったと思われる。

一方、ダイアー博士記念圖書は、日本近代教育の発足期に、工学教育用の、当時としては希少な洋書の教材を提供したという点で重要である、というだけにとどまらない。ダイアー自身の近代日本工学教育に対する指導性を裏づける点でも、注目される。虎之門会ならびにグラスゴウ会という、当時のおもに工学専門職者たちの最高レベルの組織体の面々がこの記念圖書の寄贈を計画しこれを具体化

したということは、工部大学校における工学教育ならびに日本人のグラスゴウ留学に対して、ダイアーがいかに大きな影響力を及ぼしていたかを、物語るに十分である。

ダイアー署名入り図書ならびにダイアー博士記念図書は、近代日本工学教育の発足時におけるダイアーの先導性を裏づけるものなのである。

〔注〕

- (1) H. Dyer, *Das Nippon, the Britain of the East*. Blackie & Son, London, 1904. 平野勇夫訳『大日本、技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像』実業之日本社、一九九九：Do, Japan in the World Politics: a Study in International Dynamics. Blackie & Son, London, 1909.
- (2) 三好信浩『ダイアーの日本』福村出版、一九八九：拙稿「ヘンリー・ダイアーと田辺朔郎」『UP』三四〇号（二〇〇一年二月）六一―一頁ほか参照。
- (3) 梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』第一卷（思文閣出版、一九九一）二八一頁、四二六頁に再録。
- (4) 拙稿「ヘンリー・ダイアーの胸像」『UP』三一九号（一九九五年五月）二五―三〇頁など参照。
- (5) 斎藤利彦『試験と競争の学校史』平凡社、一九九五、一六〇―一六三頁。
- (6) 進士慶幹校注『旧事諮問録、江戸幕府役人の証言』下、岩波

書店、一九八六、一三一頁…天野郁夫『試験の社会史、近代日本の試験・教育・社会』東京大学出版会、一九八三。斎藤利彦、同右。

(7) 夏目漱石の『道草』にも、健三が小学校時代に褒美をもらったときの喜びようが描かれている。ある日、父が残しておいた書付の束を開くうちに、小学校の卒業証書や賞状を見つけたこと、さらに「勸善訓蒙だの與地誌略だのを抱いて喜びの余り飛んで宅へ帰つた昔を思ひ出した」、という一節である（夏目漱石『道草』岩波文庫、昭和四四、九九頁）。『勸善訓蒙』とはフランスのL・C・ボンヌ (Louis - Charles Bonne, 1819-?) の道徳教科書の翻訳書、『與地誌略』は世界各国の地誌の概要を記したものであって、いずれも明治はじめの小学校教材である。

(8) 「工部大学校学課並諸規則(明治十年三月改正)」第七章第五節、旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料』虎之門会、昭和六、二三一―二三二頁所収。
三〇円か二〇円もする特賞の賞品とは、明治十年度と十一年度の場合、チェンバーズ百科事典(Chambers's Encyclopaedia)であった(『工部省第四回年報 工作・燈台・營繕 一』所収、頁数なし)。一八五九年から六八年にかけて出版されたばかりの、スコットランド生まれの百科事典である。当時は全十巻(改訂新版は十五巻本になる)から成り、もっとも望まれた高価な図書であったのであろう。

- (9) 「工部大学校学課並諸規則 明治十八年四月改正」第二十章第十一節および十二節、同上、二九二頁所収。
- (10) 以下の褒賞記録は、『工部省第三回年報 自明治十年七月至同十一年六月 中』および『工部省第四回年報 工作・燈台・營繕 二』前出、所収。頁数なし。
- (11) 滝沢正順「工部大学校書房の研究(一)」『図書館界』Vol.40, No.1 (May 1988) 七—八頁、十一頁。同「工部大学校の書房と蔵書」『東京大学編『学問のアルケオロジー』東京大学出版会、一九九七、二二二—二三三頁参照。本稿は、これら滝沢論文に負うところが大きい。
- (12) それぞれの請求番号と登録番号は以下のとおり。①U200/138, B64131, ②U200/139, B64130 ③U200/137, B64128。受け入れ期日は、いずれも昭和五(一九三〇)年十月二十二日。
- (13) 「工部省第三回年報 自明治十年七月至同十一年六月 中」前出、所収。
- (14) 同右。
- (15) 富田仁編著『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、一九八五、五九三頁。
- (16) ダイアーのセルフ・ポर्टレート(サイズは縦一〇五ミリ、横六四ミリ。横浜本町通および東京九段坂にあった写真館「鈴木真一」製の裏面にある署名「With truly yours Henry Dyer, 1882」)・ダイアーの書簡(University of Strathclyde, University Archives and Record Centre 蔵、所蔵番号M51—18—ほか)、あるいは後出の注(36)の書簡など参照。
- (17) 滝沢正順「工部大学校の書房と蔵書」前出、二三八頁参照。同書(T・アレキサンダー著)の請求番号はAA/a/30, 登録番号はT30289。
- (18) 同書の著者の肩書として、「Professor of Civil Engineering in Imperial College of Engineering at Tokai, Japan」とある。中山秀三郎は河川港湾学の権威で、後年、東京帝国大学教授として土木学を講じた。富田仁編著、前出、四四—頁参照。
- (19) 一年次の受賞記録(「明治十年冬期試験生徒賞典」より)はつぎのとおり。

図学科第三等 グブイットソン氏遠景画術書

マキストン氏工学上図学書

タレン氏平面幾何図学書

製図小器械一箱

数学科第一等 ブルヘマルト氏ニュトン一代記

スチワルド氏非消力論

スチワルド氏熱論

トツドハントル氏代數幾何即截錯

ケラント并テート氏クオトルニラン

理学科第一等 ウエインボルト氏試験上理学書

タムソン并テート氏理学書巻編

ターヂーブ氏器械学理論

ツツキヤル天文学初歩

二年次の受賞記録（明治十一年ヨリ十二年ニ至ル冬期試験
賞典」より）は、つぎのとおり。

予科学優等特別賞典第一等

チャンブル氏エンサイクロペジヤ十冊

図学科第二等 図引器械及尺度 各一

数学科第一等 プロクトル氏太陰ノ説書冊

同氏太陽ノ説書冊

トドホントー氏方程式之理書冊

トドホントー氏ヒストリー、オフ、セヨリー、

ヲフ、ユトラクション、エント、ビク

ル、ヲフ、セ、オールツ式冊

理学科第二等 ハーセル天文概論書冊

ステハルト氏理学階梯書冊

テート氏熱学原理書冊

ニウトン氏プリンシピア書冊

化学科第二等 ミラー氏理化学書冊

同氏無機化学書冊

『工部省第三回年報 自明治十年七月至同十一年六月 上』お

よび『工部省第四回年報 工作・燈台・營繕 二』前出、所収。

頁数なし。

(20) 田辺家資料（京都市水道局総務課管理、琵琶湖疎水記念館蔵）、

分類番号F-41.10-32。表1のうち、一八七六年度の図書は工

学寮時代の受賞図書であり、下記の文面の賞状が貼付されてい

る。

Preparatory School

Kogakurio, Tokai.

This prize was awarded to

Tanabe Sakuro

for proficiency in

Geometry, being 1st

in examination held in

Dec. 1876

R. O. R. P.]

なお、一八七八年度欄にある第一書は所在不明である。

(21) 図4はA. F. Wehhold, *Introduction to Experimental Physics,*

Theoretical and Practical, Including Directions for

Constructing Physical Apparatus and for Making

Experiments. Longmans, London, 1875 (分類番号はF4-18-

6) 図はS. Smiles, *Lives of the Engineers, the Locomotive,*

George and Robert Stephenson. John Murray, London, 1879

(分類番号はL.M-1-32)に、それぞれ貼付された賞状。

(22) 「第十一章 工部大学校時代(上)」『菅原恒覧自叙伝』上(複

製本、刊年不祥、財団法人土木学会附属土木図書館蔵) 所収、

頁数なし、および、高崎哲郎『鶴高く鳴けり、土木界の改革者

菅原恒覧』鹿島出版会、一九九八、六〇—六一頁参照。

田辺朗郎とともに、屈指の優等生として知られた志田林三郎

(電信学科、明治十二年卒)についても、つぎのように伝えられている(志田文雄編『故志田林三郎同富子記念誌』志田文雄、昭和二、一五頁)。

「八年四月には英学三等賞理学一等賞国学二等賞数学一等賞を得、更に大学教頭より合点最高点一等褒賞を受け、翌年四月再び高等数学一等賞を得(文雄註、褒賞として授与せられたる品は主に書籍にして今猶所蔵す、何れも第一頁には当時教授のサイン等あり写真参照を乞ふ)」

同書の口絵には、「褒賞の書籍」と題する写真が掲載されている。ただし、筆者はこれらの受賞図書の具体的な調査を試みていない。

(23) 北政巳『国際日本を拓いた人々、日本とスコットランドの絆』同文館、一九八四、一〇二頁。

(24) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』東京大学、昭和五九、六九〇頁。ただし、単に「褒賞として書籍を与える」というだけでなく、「各期末毎の各科目の成績優秀者には、ほとんどの場合担当教師の署名入りの書籍や学用品が賞品として与えられた」(同上)と、より限定した場合どうかということについては、筆者はまだ十分な考察を深めていない。

(25) 滝沢正順「工部大学校書房の研究(1)」前出、八頁、十一頁・同「工部大学校の書房と蔵書」前出、二二二頁、二三八頁・安藤圓秀『農学事始め』東京大学出版会、一九六四、二四六―二四七頁。正確にいうと、「毎学期ノ終リ大試験ヲ施行」

し、諸学科優等第一の者には金一〇円、諸学科優等第二には金八円、一学科優等第一には金四円という、「賞与金額二相当スル書籍或ハ器具ヲ購求シ之ヲ下賜」することがおこなわれた。安藤圓秀編『駒場農学校等史料』東京大学出版会、一九六六、二五一頁より再引。

(26) 大阪女子大学附属図書館編『大阪女子大学蘭学英学資料選』大阪女子大学、一九九一、一五四頁・日本の英学一〇〇年編集部編『日本の英学一〇〇年 明治編』研究社、一九六九、二〇頁。

(27) 田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』名古屋大学出版会、一九九五、一六六頁より再引。

(28) 「本県仏蘭西学賞典式」『愛知新聞』第十五号付録(明治五年六月) 四―五丁・拙稿「司法省お雇いフランス人教師P・J・ムリエ」『書齋の窓』No.483(一九九六年四月) 五九―六八頁、No.484(一九九六年五月) 五五―六三頁参照。

(29) 「宇治山田市史資料 教育編二」宇治山田市役所、昭和三、一三七―一四二頁・西田善男『明治初期における三重県の外語学校』三重県郷土資料刊行会、昭和四七、一〇七―一一頁・拙稿「お雇い教師フレデリック・サンデマン」、日本英学史学会『英学史研究』三三三号(二〇〇〇年一〇月) 一一二―一三六頁。

(30) 滝沢正順「工部大学校書房の研究(1)」前出、八頁・同「工部大学校の書房と蔵書」前出、二二三頁。

(31) 東京大学総合図書館の所蔵図書(請求番号および登録番号は前

出の注12参照)を、検討した。

- (32) たとは、静岡学問所および開成学校のお雇い教師E・W・クラーク (Edward Warren Clark, 1849—1907) は明治二七(一八九四)年に東京を再訪。福井藩の藩校明新館および大学南校のお雇い教師W・E・グリフィス (William Elliot Griffiths, 1843—1928) は昭和二(一九二六)年に福井を再訪。富岡製糸場お雇い技師P・ブリュナー (Paul Brunat, 1840—1908?) は明治四〇(一九〇七)年に富岡を再訪している。E・W・クラーク (飯田宏訳) 『日本滞在記』講談社、昭和四二、解説二四一頁・W・E・グリフィス (山下英一訳) 『明治日本体験記』平凡社、一九八四、解説三三四頁・武内博編著『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』日外アソシエーツ、一九九五、一一八頁、三八八頁、参照。
- (33) 拙稿「ヘンリー・ダイアーの結婚」『UP』三〇四号(一九九八年二月) 一六一—二〇頁参照。
- (34) グラスゴウ会については、上田弘之著、国際電信電話株式会社(国際電機通信学園)・(財) KDDエンジニアリング・コンサルティング(業務部) 編『日本工業の黎明——遺随使より工部大学校』国際電信電話株式会社、昭和五六、二四七—二四八頁、など参照。
- (35) 旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料附録』前出、一〇〇—一〇一頁所収。
- (36) 一九一五年四月七日付の、ダイアーから田辺朔郎あての書簡。

田辺家資料(京都市水道局総務課管理、琵琶湖疎水記念館蔵)、前出、のなかにある複写物より。

- (37) 'Death of Dr Dyer, Notable Engineer and Educationist', *The Glasgow Herald* (26 Sept. 1918) p.4; 'Death of Dr. Henry Dyer', *The Scottish Co-operator, A Journal of Progress and Economy*, Vol.26, No.1041 (27 Sept. 1918) p.415, その他参照。
- (38) 富田仁編『事典 近代日本の先駆者』日外アソシエーツ、一九九五、八二頁・『大人名事典』第一巻(平凡社、昭和二八) 九九頁。
- (39) 旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料附録』、旧工部大学校史料編纂会、一〇二頁。
- (40) 冶金学科「図書明細」。以下の「ダイアー博士記念図書」の調査にさいしては、とくに滝沢正順(東京大学工学部機械系三学科図書室)、周郷啓一(同大学工学部社会基盤工学科土質地盤研究室)、須永雅子(同大学附属図書館情報サービスク参考調査掛)の各氏からご協力をえた。記して多謝する。
- (41) 土木学科「図書原簿」一、一六二—一六三頁。
- (42) 工学部機械工学教室「図書備付證」九三頁。
- (43) 「図書原簿」第七号(東京帝国大学工科大学採鉱学科図書室) 二四六—二四七頁、二五〇頁。
- (44) 東京大学工学部「図書受入原簿」大正十五。
- (45) 「建築学教室図書目録 建築学学科教室」大正十五。

(46) 田辺家資傳、前田より。

(47) 全大はくわのりやがら。

「 JAPANESE ENGINEERS AND DR HENRY DYER

Dr Henry Dyer, of Glasgow, has received through the Japanese Ambassador in London, two handsome albums with richly embroidered covers enclosed in a fine lacquered box, containing the photographs of the graduates of the Imperial College of Engineering, Tokyo, Japan (of which he was the first Principal), from the foundation of the college till it became a college in the Imperial University of Tokyo. The albums have been got up by the Institution of Engineering of Japan, which was founded by Dr Dyer, and contains the portraits of the men who have been the leaders of industry in Japan and who have taken this method of showing their gratitude for the education which fitted them for their work, and their kindly remembrance of the man who planned and directed it.] *The*

Glasgow Herald (24 Feb. 1909) p.8.

(かとう しよんじ 名古屋大学教育学部)